

機関番号：32411

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2007 年度 ～ 2010 年度

課題番号：19730436

研究課題名(和文) コンサルテーション技法を含むカウンセラー養成プログラムの開発-社会的要請に応えて

研究課題名(英文) Development of A Counselor Training Program

Using Consultation Skills and Techniques

研究代表者 青山 洋子 (AOYAMA HIROKO) 駿河台大学・心理学部・専任講師

研究者番号：30333016

研究成果の概要(和文)：

本研究では、コンサルテーション技法を含むカウンセラー養成プログラムを作成することを目的とした。行った研究は大きく3つに分けることができる。

第一に、コンサルテーションに関する国内外のレビューを行った。その結果、①我が国においてはコンサルテーションに必要な技法や姿勢について体系化された方法論が存在せず、それらについての一致した見解も見当たらないこと、②コンサルテーション技法を含むトレーニングプログラムについても開発がなされていないこと、③①②の問題点を受けて、コンサルテーションの指導そのものも決して十分ではないこと、④一方米国においてはコンサルテーションの意義が早くから注目され、体系的な理論や技法の構築、体系化された理論に基づくトレーニングの実践などがすでに行われていること、⑤コンサルテーション研究がわが国にも急がれることの5点が確認された。

これらの問題を受け、第二に、国内外の資料の分析と、コンサルティとなる教員とコンサルタントとなる心理士へインタビュー調査を行い、コンサルタントに必要な資質や技法、視点について整理を行った。その結果、大きく6つの視点(①1対1のカウンセリングを行うことのできる技量、②組織を眺め、それぞれの相互作用の影響を考えながら、各リソースを十分に有効活用できる力(組織的な視点)、③短時間でも問題解決の方法まで提供できる迅速さなど)が挙げられた。

第三に、この6つの視点を元に、養成プログラムの作成を試みた。さらに、養成プログラムを用いて、心理士へのスーパービジョンと学生対象のトレーニングを実施したところ、本プログラムが有効である可能性が示唆された。

本研究におけるレビューで明らかにされたように、我が国でのコンサルテーションに関する研究は取り上げるべき課題が数多くあり、新米心理士たちも手探りの状態でコンサルテーション業務を行っている。一方、学校現場のSCに対する期待は大きく、その中でも効果的なコンサルテーションを行える技量を強く求められている。このことは、コンサルテーションの意義が現場でも高く評価されている現れであるとも言えよう。

本研究でなされた試みとその成果は、大変意義のあるものではないかと考えられる。

今後、本研究で作成された養成プログラムを実証的に検証することで、より精査を行っていく必要があることが課題として残されている。

研究成果の概要(英文)：

The purpose of this study is to develop a program that trains counselors using consultation techniques. This study may be divided into three broad categories:

First, we conducted a review of consultation research done in Japan and overseas. As a result, the following five points were observed: (1) systematic methodology regarding techniques or attitudes necessary for consultation work does not exist; nor has any agreement been found as to what form this should take; (2) A satisfactory training program using skills and techniques on the subject of consultation has not been developed; (3) regarding points (1)

and (2), it is obvious that neither training nor guidance in consultation methods in Japan is woefully lacking. (4) However, in the United States, the importance of consultation training based on theory was recognized early on, and systematic techniques based on those theories were established some years ago; (5) research into consultation practice in Japan has begun to pick up pace.

Faced with these shortcomings, secondly, analyses of material available in both Japan and abroad are being made, and survey interviews are being carried out in cooperation with academic staff and with psychologists aiming to become consultants; skills, techniques and viewpoints are being examined and arranged for near-term and future use. As a result, the following three points deemed essential for effective consultation have emerged: (1) skills that allow for person-to-person counseling; (2) expertise that enables the most effective use of all resources, while taking into consideration group dynamics and management organization; (3) methods by which solutions can be proffered with utmost speed even within a short period of time.

Third, preparation was put in place for a training program based on these three requirements. Further, it has become apparent that the program we initiated for students and the supervision of future psychologists has excellent potential.

As our present research has clearly shown, many problems and issues regarding research that relates to consultation in our country remain to be tackled, and even today fledgling psychologists are still fumbling around in consultation sessions. Since great expectations have been placed on counselors on site in our schools, furthermore, there has been a particular demand for skills that incorporate consultation techniques that are effective. This is a clear indication that consultation is highly regarded in the very places that it is being carried out.

Trial programs in this research and their results are believed to be of important significance. As verification of evidence emerges in trial programs monitored in this research, the necessity for ever more careful and detailed investigation remains a future topic for research.

#### 交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,200,000	0	1,200,000
2008年度	722,139	216,641	938,780
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,322,139	636,641	3,958,780

研究分野：臨床心理学

科研費の分科・細目：

キーワード：コンサルテーション、カウンセラー養成、指導プログラム

#### 1. 研究開始当初の背景

不登校やいじめ、いじめられ、発達障害などを始めとした学校において特別なニーズ

を必要とする児童・生徒は少なくなく、教師たちは多忙な業務を行いながら、児童・生徒や保護者の対応にあたっている。これに伴い、

スクールカウンセラー（以下 SC）の学校現場におけるニーズも年々高まっている。SCの学校での役割は、（１）カウンセリング、（２）アセスメント、（３）コンサルテーション、（４）研修会講師などであるが、特に学校現場では、教職員に対してのコンサルテーションの業務が重要になる。時間的にも物理的にも、SCが児童・生徒一人ひとりに関わる時間は限られる。一方、一日の大半を児童・生徒にかかわっているのは担任教師を始め、学校の教職員である。週に1、2日の勤務であることが多いSCの現状を考えれば、教職員へのコンサルテーションを効果的に行うことが、間接的に援助できる児童・生徒や保護者の数も増え、結果的にSCが児童・生徒に個別に関わるよりも、より多くの児童・生徒と保護者の支援・援助を行うことができるのである。しかし、コンサルテーションを行うにあたって、カウンセリングとは異なる技法や視点が必要とされることが経験的に言われているが、それを十分身につける機会のないまま、現場で働かざるを得ず、四苦八苦しながらコンサルテーション業務を行っているSCも少なくない。さらに、コンサルテーションを学ぶための理論の体系化がなされていないだけでなく、訓練そのものも経験に頼っておち、同様に体系化された養成プログラムもない状態である。学校現場におけるニーズの高まりとは逆に、コンサルテーションの訓練は非常に立ち後れている現状である。

## 2. 研究の目的

このような背景を受け、本研究ではコンサルテーション技法を含むカウンセラー養成プログラムの開発を行うこととした。具体的には、（１）未だ体系化されていないコンサルテーション技法について整理を行い、技法の抽出を行う、（２）（１）に基づき、コンサルテーション技法を含むカウンセラー養成のためのプログラムを作成することとする。

## 3. 研究の方法

研究の方法は以下のとおりである。

（１）国内外の文献をあたり、コンサルテーションに関する研究のレビューを行う。

（２）（１）の作業に加え、①コンサルティとなる教師にインタビューを行い、コンサルタント（SC）に必要とされる資質や技術を探る、②コンサルタントであるSCが実際に行っていることについて分析する。

これらの作業をとおして、コンサルテーションに必要とされる技法や視点、姿勢などを抽出する。これを元に、養成プログラム＜試案＞を作成する。

（４）新米の心理士へのスーパービジョンと、学生を対象にした訓練に本プログラム＜試

案＞を実施し、効果の検証を行う。

## 4. 研究成果

（１）国内外のレビューから見えてきたもの  
コンサルテーションに関する国内外の先行研究を概観した結果、国内においてはコンサルテーション技法についてはそれぞれが経験やよって立つアプローチにそって経験的に言及したものが存在するに止まり、コンサルテーションの定義そのものも未整理の状態であること、体系化され、統合化、整理された理論は存在しないことが確認された。さらにトレーニングについては、カウンセリング技法に関するトレーニングについては実践的な研究はなされているものの、コンサルテーション技法を含むプログラムの存在が確認することができなかった。

あわせて、国外特に米国に焦点をあてて専攻研究を概観した。日本に比して、コンサルテーションの重要性が早くから指摘されており、コンサルテーションの定義や技法アプローチなどについて多くの研究者が整理を行っており、統合も試みられていること、コンサルテーションに焦点を当てた研究は効果研究も含め、相当数なされていることなどが確認された。このような背景を受け、コンサルテーションに関するトレーニングの方法も考案され、実践されていることが確認された。

これらの結果から、我が国において、コンサルテーションの定義の整理を始め、技法や理論の体系化、それに基づくトレーニングプログラム等の開発が急がれることが示唆された。

（２）コンサルタントに必要とされる資質、技法、視点について

国内外の資料による文献研究や、新米心理士、コンサルティである教員、コンサルタントへのインタビュー調査をとおして、コンサルタントには以下のような資質、技法、視点が必要であることが示唆された。

①援助の前提として1対1のカウンセリングを行うことのできる技量が必要とされる。特に共感的な態度とコンサルティである教員に「気づき」をもたらすことのできる技量は、コンサルティから必要とされている。このような関わりができることが、組織との関係だけでなく、コンサルテーションを受けた後のコンサルティの実践が事例の好転結びつくかどうかの鍵となる。

②組織を眺める力（システムティックなものの見方）と事例をめぐる各リソースの相互作用とその影響を考慮にいた見方、さらに各リソースを効率的、効果的に生かすことのできる視点が必要となる。

③問題解決スキル。現場では短期的、長期的どちらの視点も視野に入れた、問題解決に焦

点を当てたアプローチが必要とされる。コンサルティや組織に、具体的な提案ができることが求められる。さらに、コンサルテーションに割ける時間は非常に限られるため、短時間の相談でも、問題解決に繋がるような具体的な助言を提案できることが求められている。

④現場ではコンサルティである教員が主役であり、コンサルタントであるSCが黒子である。しかし、組織や各リソースの関係を調整し、うまく動けるように促し、問題解決へ導いていくリーダーシップも必要である。

⑤学校ではSCは異質の存在である。しかし協働のためには、学校の文化に溶け込んでいく柔軟性が必要である。家族療法の技法で言えば「ジョイニング」が必要不可欠である。

(3) プログラムの効果について

(2)を元にプログラム<試案>を作成し、新米心理士へのスーパービジョンと学生対象のトレーニングに導入し、実践とその効果の検証を試みた。スーパービジョンに関しては、コンサルテーション業務に行き詰まる新米心理士に実施したところ、後日事態が短期間で好転したことが確認された。心理士自身からも「コンサルテーションとは何をすればよいのかがかつめた」とのフィードバックを受けた。また、学生対象のトレーニングでは、模擬カウンセリングによるロールプレイングを実施、指導の際に(2)で抽出された視点を元に指導を行った。実証的な検証については今後の課題として残された状態ではあるものの、受講生からのリアクションは大変良好であった。これら結果から(2)で抽出された視点や技法はコンサルテーションの指導に有効である可能性が示唆された。

今後、本研究で作成された養成プログラムの有効性や妥当性について、実証的な方法で検証を行い、プログラムの精査を行っていく必要があることが課題として残された。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

仲田洋子 コンサルテーション技法に関する最近の研究動向 : 国外の研究に焦点を当てて 駿河台大学論叢 (35), 135-155, 2008.

仲田洋子 コンサルテーション技法を含むカウンセラー養成プログラムの開発(その1) : 新米心理士の抱える苦悩と課題 駿河台大学論叢 (39), 139-160, 2009.

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

[産業財産権]  
○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]  
ホームページ等

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者  
(青山洋子 (仲田洋子))

研究者番号 : 30333016

(2) 研究分担者  
(なし)

(3) 連携研究者  
(なし)